

# Juichi WAKISAKA Race Report

2014 AUTOBACS SUPER GT Round 1 -OKAYAMA GT 300KM RACE-

◆◆ 待ちわびた開幕戦、岡山の戦いを 11 位で終える ◆◆

No. 19 Weds Sport ADVAN RC F		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 関口 雄飛	13位	11位



## ■大会概要

開催日：2014年4月5日-2014年4月6日

サーキット：岡山国際サーキット（岡山県美作市、コース全長：3.703km）

レース距離：82周（303.646km）

入場者数：予選日9,000名、決勝日18,000名、合計27,000名

4月5-6日、岡山国際サーキットで2014年のシリーズが開幕したSUPER GT。今シーズンはGT500の車両が全車刷新され、新時代の戦いが待ち受ける。そんな中、脇阪寿一はLEXUS TEAM WedsSport BANDO Hへと移籍。No.19 WedsSport ADVAN RC Fをドライブする。パートナーは関口雄飛。彼もまた新たにLEXUS TEAM WedsSport BANDO Hのメンバーになったばかり。ふたりしてチームを、そしてSUPER GTを大いに盛り上げるべく、岡山での戦いを迎えた。

一方、クルマのデリバリーが遅れ、3月中旬に岡山国際サーキットで行われたS-GT公式テストをスキップせざるを得なかったチームは、その後の富士スピードウェイでのテストに参加。限りある時間をフル活用し、初戦の戦いに向けて準備を進めてきた。正直、万全とは言えない中でレースウィークを過ごすことになるが、S-GTにおける豊富な経験をもとに、脇阪はチームはもちろん、TRDのスタッフらとのコミュニケーションに尽力し、着実なステップアップを目指すことを強く意識した。

今シーズン初の予選は、まさにほぼぶっつけ本番でのアタック。Q1を13位で終え、Q2進出は果たせなかった。一方、不安定な天候の下で進んだ決勝レース。途中、雨が降る場面もあったが、その中で脇阪は状況をしっかり把握した上でクルマをコントロール。関係者全員が願った完走を成し遂げ、11位フィニッシュを遂げている。

## ■4月5日(土)

09:00-11:00 公式練習

14:15-14:30 ノックアウト予選(Q1)

15:00-15:12 ノックアウト予選(Q2)

### 【公式練習】15番手 / 1'22.341

午前9時、公式練習がスタート。春の陽気が機嫌を損ねたかのような気温6度、路面温度12度というまるで冬の寒さで始まったセッションで、まずNo.19 WedsSport ADVAN RC Fには関口選手が乗り込んだ。しかし、アウト-インでピットにクルマを戻し、スタッフが迅速にセットアップの変更を施し、再び走行を開始した関口選手はセットや装着しているタイヤの確認作業を行った。

脇阪がステアリングを握ったのは、午前10時を前にした赤旗中断のあと。セット確認はもとより、広範囲に渡って細部を煮詰めるべく、周回を重ねていった。加えて、10分間のGT500専有走行時にはニュータイヤ装着を予定していたのだが、事前にそのタイヤのウォームアップに時間がかかることが判明したため、敢えて脇阪はユーズドタイヤのまま出走することを選んだ。これにより、LEXUS勢のアタックタイムとしてひとつの目安となっている1分19秒~20秒台でのスピードで走ることは叶わず。また、富士でのテストから不具合を抱える部分があり、その問題点を解決すべく対処をして走行したが、残念ながら症状が好転することはなかった。

結果、公式練習を 15 番手で終了。チーム、そして脇阪にとって依然として厳しい状況に変わりはないが、まずは目の前のミッションをひとつずつクリアすることに全神経を集中することに違いはない。



### 【ノックアウト予選 (Q1)】 13 番手 / 1'20.945

今シーズンの予選は、昨年同様に全戦でノックアウト方式が採用される。ラストアタックにあたる Q2 に進出するためには、まず No.19 WedsSport ADVAN RC F は上位 8 台に食い込むことが求められる。

チームは、Q1 のアタッカーとして関口選手を選択。RC F による初アタックに挑んだ。気温 10 度、路面温度 23 度と朝の走行時より暖かな数値を刻むものの、上空には灰色の空が広がっている。関口選手はセッション開始から 5 分を迎える少し前にコースへと向かい、アタック開始。計測 4 周目に 1 分 20 秒 945 のタイムで暫定 4 番手につける走りを見せた。

だが、朝のセッションで発症していたトラブルが引き続き見られたことから、大事をとってアタックを切り上げる。一方でライバル勢はセッション終了までに続々とベストタイムを更新していく。結果、Q1 を 13 番手で終えることになり、Q2 への進出は果たせなかった。

自らアタックすることなく予選日を終えた脇阪。短いようで長い一日を振り返り、「このクルマでの走行はまだ 3 日目だから」と切り出した。「ある程度、走らせることはできていますが、富士でのテストから、エンジン自体は問題ないのですがエンジンの回転がスムーズに上がらないトラブルを抱えており、別のものに置換したものの、それでもやはり同様の症状が出ていました。データ上では、これが原因で 1 周につき約 1 秒近くのタイムロスになることがわかっています。残念ながら症状を改善するまでには至らず、そのまま予選を迎えることになりました。ただその中で、アタックを担当した関口選手はものすごく頑張ったと思います」と新たなパートナーを思いやった。



## ■ 4月6日(日)

09:00-09:30 フリー走行 (09:40-10:00 サーキットサファリ)

14:00- 決勝 (82周)

### 【フリー走行】 15番手 / 1'35.437

前日は全セッション終了後、キッズウォークを境に雨が降り始めたものの、夜半には上がり、決勝日の朝は青空が広がっていた。ところが午前9時からのフリー走行を前ににわかには天候は下り坂へ。あっという間に雨となり、セッションに向けてウェット宣言が出された。

加えて、フリー走行直前には雹(ひょう)混じりの雨が強い風とともに降ってくる。春の嵐とでも言うような、荒れた天候の中でNo.19 WedsSport ADVAN RC Fはインターミディエイトタイヤを装着、コースへと向った。ドライブ担当は関口選手。不安定な路面の中、着実に好タイムをマークする働きを見せた。

セッション開始から10分を過ぎると雨も止み、次第に路面もドライの方向へと変化していく。チームではこのタイミングでピットインを行い、脇阪へとスイッチ。その後、ウェットタイヤからドライタイヤへの変更タイミングのチェックを行いながら、幾度となくピットインを繰り返し、決勝に向けての微調整を重ねていく。こうして脇阪は、セッション最終ラップとなる13周目に1分35秒437のチームベストタイムをマーク。ポジションこそ15番手だったが、目の前に山積する“やるべきこと”をひとつひとつシューティングしようとする強い意思が感じ取られた。

決勝レースを前に行われたピットウォークでは、再び青空と心地よい日差しがサーキットに戻ってくる。LEXUS TEAM WedsSport BANDO Hのピット前には多くのファンが詰めかけ、脇阪は写真撮影やサインに応じた。



### 【決勝】 11位 / ノーポイント (シリーズポイント: 0ポイント、シリーズランキング: 11位)

ダミーグリッドに勢揃いした39台のSUPER GT車両。気温8度、路面温度20度と冷たい風が吹く中、刻々とスタートの瞬間が近づいてくる。なお、今回はスタート手順に変更が行われ、まずウォームアップとして1周、その次にフォーメーションラップが1周行われた。予定ではここで先導するセーフティカーがピットインことになっていたが、隊列が整わず、さらにもう1周フォーメーションラップが追加されることに。これにより、レース周回数は82周から1周減算の81周に変わった。

No.19 WedsSport ADVAN RC Fのスタートドライバーを担当するのは、関口選手。オープニングラップも落ち着いて処理、上位陣の接触によるアクシデントもあり、早速11番手までポジションアップを果たす。以後も関口選手は安定してラップを重

ねていたが、レース開始から 30 分が過ぎた頃、突如として雨が落ちてくる。しかし、関口選手は安定したタイムを刻み続け、43 周目にルーティンワークのピットインを果たした。

脇阪・関口選手ふたりによる初のドライバー交代もスムーズに進み、脇阪がコースへ。ところが、この開幕戦を迎えるまでに走行の機会が限りなく少なかったため、新車となったクルマの挙動をつかむのが難しく、しばらくの間、巧みなドライビングで暴れるクルマをなだめすかすように走り続けた。このため、大きなタイムロス強いられたが、決して諦めることなく周回を重ね、ようやく終盤は安定したペースでの走行を実現。厳しく、荒れたレースを走破した No.19 WedsSport ADVAN RC F は 11 位でフィニッシュ。おしくも入賞 & ポイント獲得にわずかに及ばなかったが、第 2 戦富士に向けてさらなる目標を掲げ、速さ、そして強さを追求すべく突き進んでいく。



「本当に厳しいレースとなりました。でも、それよりもレースを完走できたことが僕らにとってのスペシャルだと思います。短い時間の中、トラブルを抱えたクルマをメカニックのみんなが懸命に改善して、今回のレースでなんとか走らせることができるという状況でした。残念ながら、決勝では様々な要因からタイムロスすることもありましたし、レースまでに僕自身がまだこのクルマのすべてを理解するには時間が足りなかったこともあります。これからもっとしっかりと色々な仕事をして、クルマを作っていきたいと思います。関口選手も頑張ってくれました。富士に向けてまた気持ちを引き締めて取り組んでいこうと思います。最後になりましたが、限られた時間の中でここまで頑張ってクルマを仕上げてくれたメカニック、チーム、TRD、関わってくれた全ての方に感謝しています」と脇阪。ライバルたちよりもやや遅めのスタートを切った開幕戦だったが、富士では新たなポテンシャルを披露してくれることだろう。

次戦は、5月3日(土)-4日(日)に富士スピードウェイ（静岡県御殿場市）で開催される。

[Photo Gallery]



